

## フードバンクさが設立趣意書

日本を含め世界的な市場競争一辺倒の経済や政治によって、様々な分野で解決困難な歪みが生み出されています。地球規模の環境問題はその典型です。経済優先、成長優先の考え方方が大量生産、大量廃棄の事態を様々な商品で生み出し、それは私達の命の源泉である食品の分野でも例外ではありません。今日本では年間646万トンもの食品が、活用されることもなく廃棄され、国民一人当たり、毎日お茶碗一杯分の食品を捨てていることになっています。そんな状況を変化させ、食に係る人々（生産者、加工業者、流通業者）へ感謝し、食の大切さを大事にしていくことは、それを生み出す地域の環境を保全し、人々を、食を通じて結び付け、地域コミュニティーの再生にもつながっていくのではないかでしょうか。

フードバンクは市民レベルで食品ロスと貧困の問題を橋渡しするために、今から半世紀前にアメリカで産声をあげた合理的な市民活動ですが、2000年代に入りようやく日本でも各地で設立されはじめ、今や全国的な運動として広がりを見せています。

私達呼びかけを中心としたメンバーは、急務となってきた食品ロス問題の解決だけでなく、将来的にはフードバンク運動が地域の再生や、助け合う福祉の向上にもつながるのではないかと考え、この間、連続学習会「フードバンクってなあに？」の開催や、既存のフードバンクの視察・交流を重ねてきました。

その中で県内各地でも、行政の支援では手の届かないところにも寄り添う子ども食堂開設、高齢者も含む世代を超えた居場所づくりなど貧困の解消や、様々なつながり・助け合いの再生に取り組む団体・個人が広がりつつあることを知りました。また、現在の貧困の問題は、単に「経済的な貧困」だけでなく、本当の「豊かな生活」とは何かを忘れてしまう「心の貧困」、コミュニケーションの希薄化に伴い、生活者が助け合うことが難しくなる「地域コミュニティーのつながりの貧困」であることにも気付きました。

私達はその思いの共有、学びを通じて、食品ロスとして廃棄するしかなくなっている食

品の、生産者・関連企業・団体・個人からの善意の寄贈を、必要とする様々な団体や個人に提供する活動の大切さを痛感しました。そして、食品の寄贈を通じて、企業と支援団体、支援団体と支援を必要とする人達をつなぐ役割を果たすことで、地域コミュニティーの再生や貧困の格差をなくす為の手立てになると確信し、今こそ賛同者の総意を持って県内唯一のフードバンクを設立すべき時との結論に至りました。

ここに「フードバンクさが」の設立を宣言し、多くの団体・個人に、趣旨への賛同と活動への参加、協働を呼びかけます。

2019年 3月21日

フードバンクさが設立総会  
呼びかけ人

秋山 翔太郎  
石原 太郎  
喜多 裕彦  
桑原 廣子  
古賀 直  
辻 泰弘  
直塚 美保  
中原 龍彦  
中山 志穂  
鍋田 博  
原 さゆり  
干潟 由美子  
福井 健一  
牧 興道  
松本 祥仁  
宮崎 知幸